

Letter for Members

【コンテンツ】

- 第 123 回学術大会 325
 —123 回学術大会
 —平成 26 年度専門医研修単位認定セミナー
 —市民フォーラム
- 86th Annual Meeting of The American Prosthodontic Society 参加記..... 330

公益社団法人日本補綴歯科学会

第 123 回学術大会

メインテーマ

「補綴歯科から発信する医療イノベーション」

● 第 123 回学術大会開催

公益社団法人日本補綴歯科学会 123 回学術大会は、平成 26 年 5 月 24 日（土）、25 日（日）に佐々木啓一（東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野・教授）を大会長として仙台国際センターにて開催された。大会テーマは、「補綴歯科から発信する医療イノベーション」であった。

学術大会に先立ち、23 日（金）にホテルメトロポリタン仙台にて懇親会が開催された。服部佳功教授（東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野）が司会を務め、大会長の挨拶に引き続き、矢谷博文理事長、住友雅人日本歯科医学会会長よりご挨拶をいただいた。その後、細谷仁憲宮城県歯科医師会会長のご発声にて乾杯を行った。料理は仙台名物牛タンや笹かまぼこ、白石温麺等がならび好評であった。また余興として、口

腔システム補綴学分野秘書が所属する仙台サクソフォンアンサンブルクラブによる演奏が行われるなど、趣向を凝らした懇親会であった。多くの会員、非会員の方々が参加され、大いに懇親、情報交換が行われた。盛会の中、江草宏教授（東北大学大学院歯学研究科分子・再生歯科補綴学分野）から閉会の辞が述べられた。

学術大会第 1 日目は、開会セレモニーが催され、佐々木大会長の挨拶に続き、矢谷理事長から学術大会の企画内容についての紹介を交えた挨拶があった。開会時の理事長挨拶は、これまで行われていない企画であったが、全会場へのビデオ配信もなされ、学術大会への期待が一層、盛り上がった。引き続き第 1 会場は、臨床スキルアップセミナーで幕を開けた。「可撤性補綴装置の支台としてのインプラントの活用を考える」と題して、鮎川保則先生の進行で、西村正宏先生による「可



懇親会 佐々木啓一大会長の開宴の挨拶



余興 仙台サクソフォンアンサンブルクラブによる演奏



懇親会 左から赤川安正先生、Patrick M. Lloyd 先生、矢谷博文理事長、古谷野潔先生



辻哲夫先生の特別講演 1

撤性義歯の支持・維持・把持に役立つインプラントの有効な使い方とは、近藤尚知先生による「インプラントオーバーデンチャーを適切に機能させるための埋入手術—CTデータとPCシミュレーション、サージカルガイドを応用したインプラント埋入手術—」の講演が行われた。インプラントを支台とした可撤性補綴装置のエビデンスや治療の勘所、設計や維持装置の選択などに関する活発な討論が繰り広げられた。続いて、臨床リレーセッション1「補綴臨床におけるCAD/CAMワークフローの現状と未来」が行われた。二川浩樹先生、前川賢治先生の進行で、高橋健先生による「プロビジョナルレストレーションを活用したCADモデリングの実践と考察」、水口俊介先生による「CAD/CAMによって全部床義歯製作のワークフローはどう変わるべきか」、樋口鎮央先生による「上部構造のプロビジョナルレストレーションを最終補綴物に置き換えるためのデジタル技術の応用」の講演が行われ、インプラント、クラウンブリッジ、床義歯におけるCAD/CAMワークフローの現状と今後の課題について活発な討論が行われた。午後は、東京大学高齢社会総合研究機構の辻哲夫先生による特別講演1「老いても最後まで生活者たらんために—補綴歯科医療に期待するもの—」が、矢谷博文先生の進行のもと行われた。「「食べる」ことへの横断的アプローチの重要性—柏での取り組みを中心に」と題し、超高齢社会において歯科の果たすべき役割と多職種連携のあり方について貴重な情報が提供され、会員にとって大変有益な講演であった。続いて、臨床リレーセッション2「サルコペニアの予防と改善に寄与する補綴歯科を目指して—多職種連携による高齢者の口腔機能、栄養、運動機能の改善—」(専門医研修単位認定セミナー)が催された。松山美和先生の進行で、東京大学高齢社会総合研究機構の飯島勝矢先生から「虚弱・サルコペニア予防における医科



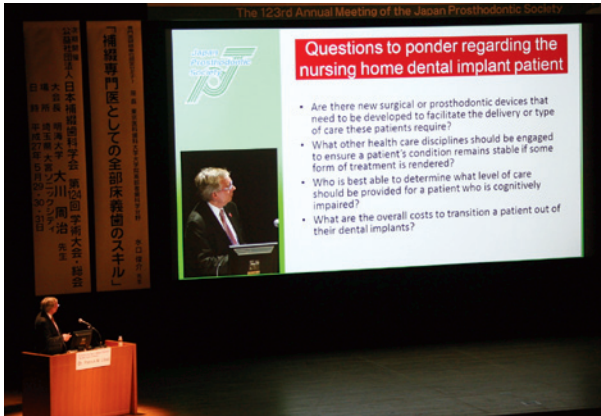
シンポジウム2 会場からの質問に答える辻孝先生

歯科連携の重要性：～高齢者の食力を維持・向上するために～、福岡クリニック在宅部栄養課の中村育子先生から「在宅訪問栄養食事指導と歯科との連携による栄養改善」、九歯大口腔保健学科の金久弥生先生から「超高齢社会における歯科補綴治療：歯科衛生士からの提案」、菊谷武先生から「栄養改善を目標とした運動障害性咀嚼障害患者への取り組み」と題した講演が行われた。

第2会場では、午前中は一般口演が行われた。午後は、委員会セミナー1「ノンメタルクラスプデンチャーとは—適応とその留意点—」が、藤澤政紀先生を座長に、笛木賢治先生、大久保力廣先生を講師として行われた。続いて、シンポジウム1「再生医療はどこまで来たか：原理と臨床展開にむけて」では、窪木拓男先生、魚島勝美先生を座長に、理化学研究所の辻孝先生による「口腔器官の再生医療」、東北大学小児発達歯科学分野の福本敏先生による「歯に異常を示す遺伝性疾患から考える歯の形態形成の分子機構とその制御」、山下徹先生による「次世代細胞(iN細胞)を用いた病態解析と再生治療への展望」の講演が行われた。近年の歯科分野においても進展が目覚ましい再生医学の臨床実用化に向けて、口腔組織の再生治療の最新の知見をもとに、臨床応用の可能性や展望についての講演と活発な議論がなされた。

第3会場は、課題口演によって幕が明けた。「バイオロジー」、「トランスレーショナルリサーチ、臨床イノベーション、臨床効果の評価」、「口腔機能と全身疾患との関連」の3つの課題について選出された計9名のファイナリストによる発表と指定質問者との質疑応答が行われ、審査が行われた。午後は一般口演が行われた。

第4会場は、主に第1会場のサテライト会場となった。専門医研修会では参加者が多く、サテライト会場



Patrick M. Lloyd 先生の特別講演2



ポスターおよび企業展示会場の様子

にも関わらず満席状態であった。第5会場はポスター展示と企業展示が行われた。広い会場であったが発表者と参加者で埋め尽され活況を呈した。

また午後5時から6つのイブニングセッションが、第2, 3, 4, 8, 9, 10会場で並行して行われた。今後の本学会の研究戦略と方向性を若手研究者によって導き出すため公募によって選考されたコーディネーターの吉田光由先生、松田謙一先生、竹市卓郎先生、峯篤史先生、加来賢先生、水口一先生が各セッションのコーディネートをを行い、それぞれが提案するテーマに関して自由かつ活発な討論が行われた。初めての試みで夕方の遅い時間にもかかわらず各会場とも予想以上の参加者が集まり、大変盛況なセッションとなり、会員の高い学習意欲が感じられた。一方、会場に入らなかった方がいたのは大変悔やまれた。

2日目の第1会場では、まず臨床リレーセッション3「オベイトポンティックを考える」が開催された。金田貴哲先生と園山巨先生の進行により、大村祐進先生が「オベイトポンティック作製のための補綴処置」、白石和仁先生が「オベイトポンティック作製のための術前処置」、木村好秀先生が「チェアサイドで準備した理想的なポンティック形態を最終補綴装置に移行させるための技工術式」と題して講演された。続く特別講演2では、The Ohio State 大学歯学部長・教授の Patrick M. Lloyd 先生による「Will today's solutions to yesterday's problems be the nightmares of tomorrow?」と題した講演が行われた。超高齢社会を迎え、今後ますます増加する高齢者や要介護高齢者への歯科補綴治療、特にインプラント治療における課題、すなわち将来生じる身体状況および口腔環境の加齢変化に対応し得る治療計画の立案指針や、インプラント装着患者の有病化や要介護になった場合の対応についてわかりやすくご教授いただいた。午後の専門医研修単位認定セミナー「一補綴専門

医としての全部床義歯のスキル」では、水口俊介先生を座長として、鱒見進一先生は「人工歯の選択、排列、咬合調整について」、大久保力廣先生は「印象採得とデンチャースペースの記録」、皆木省吾先生は「在宅など超高齢者への義歯治療スキル」と題した講演をなされた。全部床義歯のスキルが大きく反映されるポイント、そのポイントを確実に抑え義歯の性能をアップさせる方法のわかりやすい解説、興味深い討論がなされた。前日と同様、第1会場およびサテライトの第4会場とも満員になるほど盛況であった。

第2会場では、朝8時より他会場に先立ち教育講演「日本補綴歯科学会は歯科医療機器開発にどのように貢献できるか—産学連携の在り方を中心として—」が、スタートした。魚島勝美先生の進行で高橋英和先生、原田直子先生によりご講演いただいた。薬事法に関する基本的な解説をしていただくとともに、現在の問題点や今後の取り組みについてわかりやすく大変有益な講演がなされた。続いて、シンポジウム2「補綴歯科治療と生体—バイオマテリアルインターフェイス」が催され、佐々木啓一先生の座長のもと、古谷野潔先生による「口腔組織—チタンインプラントインターフェイスの成立と維持」、東北大学金属材料研究所の後藤孝先生による「生体セラミックスコーティングの作製」、東京医科歯科大学生体材料研究所の塙隆夫先生による「金属材料の生体機能化—研究の落とし穴と実用化への壁—」と題した講演が執り行われた。歯学のみならずマテリアルサイエンス等の分野から、これまでのインターフェイス研究あるいは開発に関する知見や今後のインターフェイス研究の進展、課題に関する話題を提供され、今後の歯科補綴学あるいは補綴歯科医療への展開に関する深い討論がなされた。

午後のシンポジウム3「大規模災害における歯科の対応を再考する」では、服部佳功先生を座長として、

鈴木敏彦先生は「大規模災害における歯科的身元確認」、小野寺勉先生は「被災地歯科診療に携わった地元歯科医師の一考」、坪井明人先生は「大規模災害における巡回歯科支援—東日本大震災の経験から—」と題した講演が行われ、震災の直接的被害が著しかった宮城県において、歯科医療者はいかに活動し、どれほどの効果を生み、またいかなる問題を残したのか、震災後の現場を証言するシンポジストとの議論がなされた。

第3会場では、第2会場と同じく朝8時よりモーニングセッション「ビッグデータによって変革する医療」が池邊一典先生を座長に、大阪大学サイバーメディアセンターの下條真司先生から「ビッグデータによる医療イノベーション」、玉川裕夫先生から「身近になったビッグデータをどう使うか—電子的に蓄積した診療情報を活用するには—」の講演がなされた。その後は一般口演が行われた。

また、第6,7会場では、4名ずつ計8名の専門医ケースプレゼンテーションの審査が行われ、例年同様多くの参加者が集まり、活発な討論が行われた。

学会の最後のイベントとして、第1会場で課題口演優秀賞受賞者3名、課題口演賞受賞者6名、優秀ポスター賞であるデンツブライ賞受賞者6名、カポデンタル賞受賞者2名の表彰式が執り行われ、その後、閉会式を迎えた。

両日を通して2,200名を超える参加者を迎え、また市民フォーラムも160名近くの参加者があり、口頭発表78演題、ポスター発表131演題と演題発表も多く、盛会のうちに幕を閉じた。本大会の準備にご尽力いただいた矢谷理事長、窪木拓男学術委員長、学術委員会



多くの聴講者が訪れた第一会場 専門医研修単位認定セミナーの様子



表彰式 課題口演優秀賞と課題口演賞受賞者

の皆様、学会関係各位、ならびに後援団体各位に厚く御礼申し上げます。ご参加いただきました皆様にも心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(東北大・小川 徹)

●平成26年度専門医研修単位認定セミナー報告

平成26年度専門医研修単位認定セミナーは、平成26年5月24日(土)25日(日)の両日に第123回学術大会に併せて仙台国際センターで開催された。24日(土)には、臨床リレーセッションとして「サルコペニアの予防と改善に寄与する補綴歯科を目指して—多職種連携による高齢者の口腔機能、栄養、運動機能の改善—」というテーマで職種の違う4名の演者の講演が行われた。東京大高齢社会総合研究機構の飯島勝矢先生が「虚弱・サルコペニア予防における医科歯科連携の重要性：～高齢者の食力を維持・向上するために～」、日歯大の菊谷武先生が「栄養改善を目標とした運動障害性咀嚼障害患者への取り組み」、福岡クリニック在宅部栄養課の中村育子先生が「在宅訪問栄養食事指導と歯科との連携による栄養改善」、九歯大口腔保健学科の金久弥生先生が「超高齢社会における歯科補

綴治療：歯科衛生士からの提案」と題して講演された。食環境の悪化から始まる筋肉減少を経て最終的に生活機能障害に至る構造が示され、口腔機能・栄養状態の低下という顕在化した局面よりも早期の段階から介入が必要であると述べられた。その中でサルコペニア予防を中心に見据え、「高齢者の食力」を維持・向上させるためには食の偏りと歯科口腔系の不具合が初期変化として重要であることを訴えていた。また現状の超高齢社会において補綴歯科学会が中心的役割を担っていた器質的な咀嚼障害に加え、運動機能的な咀嚼障害を持つ高齢者が増加しており、口腔機能向上プログラムや食形態を変えて対応して行くことの重要性を述べられた。その取り組みの中で多職種と連携を保って、安全に口腔から栄養を確保することの重要性を再認識することが出来た。

25日(日)には、「補綴専門医としての全部床義歯



補綴専門医としての全部床義歯のスキル

のスキル」というタイトルで3名の演者の講演が行われた。九歯大の鱒見進一先生が「人工歯の選択、排列、咬合調整について」、鶴見大の大久保力廣先生が「印象採得とデンチャースペースの記録」、岡山大の皆木省吾先生が「在宅など超高齢者への義歯治療スキル」と題して講演された。鱒見先生による人工歯選択、排列、咬合調整方法、大久保先生によるピエゾグラフィー

とFBIを用いた義歯作成法が動画をまじえて詳細に解説され、成書などではイメージしにくい術式を理解すること出来た。皆木先生には在宅等の義歯治療において、全部床義歯のスキルが大きく反映されるポイントと、義歯の性能をアップさせる方法を学ぶことが出来、上下人工歯咬合面に直行する溝を付与することや床縁過長部の診断方法などの方法を知ることが出来た。3名の発表とも全部床義歯の臨床にすぐに役立つ内容であった。また最後のディスカッションにて会員の先生から、全部床義歯を専門とする先生でも難渋する「下唇の口唇圧の強い患者さんへの対応について」、「舌後退位の患者さんへの対応について」の質問がなされ、各講師の先生方より示唆溢れるご回答を伺うことが出来た。両セミナーとも専門医更新予定者ならびにこれから専門医を申請しようとする多くの会員の先生方で第1会場とサテライト会場が満員となる盛況であった。専門医の臨床において更なるステップアップを目指す内容が多く含まれており、非常に有意義なセミナーであった。(医歯大・関田俊明)

●市民フォーラムのご報告

公益社団法人日本補綴歯科学会第123回学術大会の併催企画として、社会連携委員会の企画・運営により、市民フォーラムが平成26年5月24日に仙台メディアテークで開催されました。

「歯科インプラントに対する疑問と不安に答えるー歯科インプラントの現状と未来ー」というテーマのもと、座長の社会連携委員会委員長・佐藤博信先生による挨拶に始まり、日本にインプラント治療を導入した先駆者である小宮山彌太郎先生と東北大学病院・歯科インプラントセンターの小山重人先生（本学術大会実行委員長）の二人が講師として紹介されました。小宮山先生の講演は長い臨床経験に裏打ちされた、造詣の深い内容で、市民に向けられた内容にも関わらず、我々専門医にとっても非常に奥の深い、感動的な話でした。市民に向けたメッセージとして、過剰な広告など、偽りのある情報や歯科医師の態度などから判断される良くない歯科医師の見抜き方が話され、歯科医師の選択に際し、市民も賢明な目を持つ重要性と必要性が強調されました。小山先生の講演はインプラント治療の実際と東北大学病院での受診方法など、市民にとっての実際的な、非常に有益かつ重要な内容でした。講演後の質問に対する座長と二人の講師による丁寧な回答がなされましたが、予定の30分ではすべての質問に回答できず、残りの質問は東北大学病院で対応するほ



質問に答える小宮山先生、右：佐藤先生、左：小山先生

ど多くの質問がありました。それほど市民の関心が強いテーマであり、インプラント補綴治療は非常に真摯に取り組まなければならない歯科治療であることを再確認させられました。

会場は仙台メディアテークの1階入り口すぐのオープンスペースに設営されており、市民フォーラムの会場として最適と思える環境でした。参加者に用意された椅子はほとんど埋めつくされ、活発な質疑応答もあり、盛況のうちに幕を閉じました。学術大会主管の東北大学の皆様ならびに関係各位にこの場を借りて深く感謝を申し上げます。(福歯大・松浦尚志)

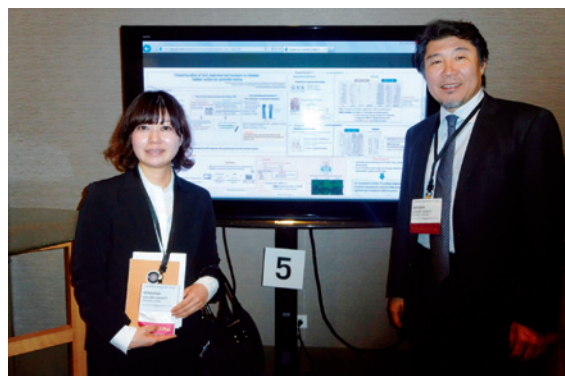
86th Annual Meeting of The American Prosthodontic Society 参加記

この度、2014年2月20-21日にアメリカ、シカゴで開催されました86th Annual Meeting of The American Prosthodontic Societyに参加しましたので、ご報告いたします。学会はミシガン湖の湖畔に位置するSwissotel Chicagoにて開催されました。九州で生まれ育った筆者にとっては冬のシカゴとあって大変に寒く、湖に大量の流氷が浮いている様子が印象的でした。学会では21演題の教育講演と43演題のテーブルクリニックが行われました。講演内容はそれぞれ基礎研究から臨床の症例など、幅広い分野に及んでいました。また、それぞれの基礎研究の演題も臨床に直結するテーマが多かった印象でした。九州大学からは熱田生助教、大城和可奈大学院生がテーブルクリニックでの発表を行いました。このテーブルクリニックの発表はいわゆるポスターセッションと近い形式なのですが、事前にデータを送ると、ポスターサイズほどの大きなモニターに映し出されるというものでした。そのモニターの前で質疑応答を行い、大城和可奈先生はbest table clinic presentation awardを受賞しました。この受賞は日本補綴歯科学会のプレゼンスを示すものとなったと思われます。

(九州大・古橋明大)



九州大学インプラント・義歯補綴科参加メンバー集合写真



大城和可奈先生と古谷野潔教授



学会場からの眺望